

News Letter vol.12 2011.4.12

国立台湾大学で新たな理論を作る

派遣国名: 台湾
受入機関: 台湾大学
派遣期間: 2011.1.7~2011.3.31

私は、組織的な若手研究者等海外派遣プログラムを利用して、国立台湾大学を3カ月間訪問させていただきました。私は森林の水収支に興味を持っています。森林の水収支というのは、森林に降った雨のうち、どれだけが蒸発や蒸散で大気に還り、どれだけが河川へ流出するかというようなことです。

森林の水収支を知ることは水資源管理などにおいて大切なので、欧州・米国・豪州を中心に多くの観測が行われ、データが蓄積されてきました。しかし、これまでデータがあまり報告されてこなかった湿潤アジア地域の森林水収支は、比較的乾燥した欧州・米国・豪州と異なるということに、私は以前行った研究で気付きました。そこで、湿潤アジアを含む、全世界の森林水収支を表現できる理論を作ろうと思いました。そこで私は台湾を訪問しました。台湾には森林水収支に関する未発表のデータが多く存在し、訪問先の国立台湾大学には、東南アジアの森林水収支のデータを収集した経験を持つ久米朋宣助理教授がいらっしゃるからです。



3ヶ月間の訪問の間に、世界の829試験地のデータの収集に成功し、現段階において世界で最も充実したデータセットを作成しました。このデータセットを使って、従来の森林水収支の理論が、中緯度・高緯度の湿潤地域で現実を反映していないことを示し、世界中で使うことのできる新たな理論を構築しました。

以上のように、今回の海外派遣で一定の成果を挙げることができましたが、海外で研究させていただいたことの効果はそれにとどまるものではないと感じました。なぜなら、海外という日常業務に追われない静かな環境に身を置くことで、今まで自分が自らの研究の意味を十分に突き詰めていなかったことに気づき、これからの研究の方向性を練り直すことができたように思うからです。その意味で、今回の海外派遣は、私にとって一つの転機になるのではないかと考えております。

このような機会を持つことができたのは、多くの方々のご支援があつてのことです。戦略企画係の方々には、いつも手続きを丁寧に、そして迅速にいただきました(とくに藤原さん、波多さんには直接的にお世話になりました)。森林資源科学の諸先生方(とくに、大槻恭一先生、内海泰弘先生)には、私の不在の間、さまざまな形で支えていただきました。訪問先の久米朋宣助理教授には、研究面はもちろんのこと、生活面でも大いに助けていただきました。ありがとうございました。



(写真(左):オートバイの行き交う道路、
(右):珍しい果物が並ぶ八百屋)